

### 話題提供 3 「教育の効果を評価する」

吉 田 文（メディア教育開発センター研究開発部教授・GP実施委員会委員）

（大塚） それでは続いて、メディア教育開発センターの吉田文さんからお願いいたします。先ほど、特色GPと言いました。分からない方はいないのではないかと思いますけれども、最近、アルファベットで省略する言い方が多くて、私も時々、何のことやらよく分からないということがしばしばありますが、GPはグッド・プラクティスの略ですが、特色ある教育プログラム、いやもうちょっと何かありましたね、大学教育支援プログラムですか、正式の名称は言えなくなってしまうということもありますけれども。その特色GPの話題を中心に吉田さんからお話をいただきます。よろしくお願いいたします。

（吉田） ご紹介にあずかりました、メディア教育開発センターの吉田でございます。

評価ということに関しましては、私のメディア教育開発センターも、大学評価・学位授与機構の試行的評価を3か年度、続けて受けてまいりまして、所内にいる者として、自己点検・評価報告書の取りまとめにも随分労力を割いてきました。それとともに、教育のCOE版として始まりました特色GPと呼ばれているプログラムの評価の審査員としても、プログラムを作る段階からかわってきましてので評価される側の大変さも身をもって体験しておりますし、他方、どういう形で評価の枠組みを作っていくかという、評価する側の大変さも体験してきた者です。

そういう立場にある中から、今日は特色GPのプログラムに従事してきた者として、その中で何が特に議論され、それは今の日本の大学にとってどういう問題を象徴しているのかということを中心に、お話ししたいと思います。若干の打ち明け話というか、裏話でもないのですが、そのようなことも踏まえてお話しさせていただきます。

恐らくここにお集まりの先生がたの中でも、ペーパーレフェリーや、審査員で特色GPの評価をする側に回ったかたも多くおられるでしょうし、他方、大学としてプログラムへ申請するということで、申請書の作成に従事されたかたも多くおられるのではないかと思います。ここの京都大学も昨年度選定されておられるので、田中先生をはじめ、センターの先生がたは大変なご苦勞をされたのであろうということも拝察いたします。

今年度で3か年目になります。一昨年、2003年3月に突如、文科省に呼ばれました。そのときに、まだ公表していないのだけれど、COEの教育版を作る計画がある、しかし、どういうプログラムで作っていったらいいかということ、まだこれから決めなくてはいけないという会議に呼ばれました。会議といっても、ほんの数人集まったもので、本当に雑談程度でした。

しかし、ここで、教育のCOE版という話が出しても、教育を評価するということです。教育を評価する、果たしてそれはどうやったら評価できるのかといったときに、教育を研究の対象としております者としても、一体何をモデルにして考えたらいいのかということは、私も全然プランがありませんでした。これは私だけの問題ではなく、そこに集まれた数人の先生がたも、アイデアは分かる、しかし、何をしたらいいのかということについては皆目検討がつかないといった会議でした。

ただ、二つだけ決めたことがありました。ランキングにはしないということです。研究であれば、ピアの中で、どちらがより優れているかという評価は可能です。しかし、優れた教育を取り出すといっても、それが果たしてランクになじむものか。恐らくそれは違うだろうということで、ランキングには絶対しない。むしろ、そうしないことで、特色ということを前面に打ち出すということが、一つ決まりました。

もう一つは、選抜の単位と評価の側面をどうするかということです。教育というのは日常的に教室の中で、行われております。それは、教員個人の裁量にゆだねられているものであって、教育を公開するということはこれまで日本の大学にはあまりなじみがありませんでした。したがって、優れた教育といったときに、それは教員個人の問題なのか、教員の資質にかかわるものなのか。あるいは、大学として組織的に教育に取り組んでいるということの評価すべ

きなのか、という議論が一つありました。それが、この図でいえば、組織なのか個人なのかという問題です。個人を対象として選抜していくのか、あるいは、大学の組織的な取り組みとして選抜していくのかということが一つの議論の軸です。

もう一つの議論の軸は、研究に対しての評価というのは、これはCOEに代表されますし、科研費等にも代表されますけれども、今後の研究の取り組みの計画に対して、その独創性や実現可能性が評価されて選定されます。したがって、ある意味では、若干の過去の実績は伴いつつも、どれだけ今後の計画がきちんとできているか、その計画の実効性がありえるかという点で評価をします。しかし、教育はそうではないだろうということです。むしろ、過去にここまでやってきたという過去の蓄積・実績に基づいて評価すべきだろうという議論もありました。

しかし、他方、教育といえども、これは一定のプランに基づき、今後どのように展開していくかという側面も評価されなくてはおかしいという議論もあり、そのあたりの議論は錯綜したのですが、とりえず組織的な取り組みであり、過去の実績に基づくような教育のプログラムを選定するようなものにしようということに落ち着きました。

次に、何が議論になったか。これからの話は、公式な委員会が設置されまして、その中で議論されたものです。

例えば教育といっても、いきなり何でもありというわけではないだろうということで、組織的な取り組みを幾つかのブレイクダウンした形で、そのテーマごとに申請していただこうと考えたわけです。教育といえば当たり前のように出てくるのが、教育課程と教育方法です。教育課程、教育方法という枠組みはすぐ決まったのですが、そのあとが決まらないのです。教育課程と教育方法に背反するような形で並列で取り上げるテーマとは何かといったときに、そこが非常に苦労した点です。

一つは、それを包括的に見るようなものとして、総合的な取り組みというテーマ設定もしました。包括性ということで、総合的取り組みになります。他方、教育課程、教育方法、これはある意味では教室における正規の授業を指したもの、正規のカリキュラムを指したもの、それに伴う教育的な方法を指したものとすれば、現代の大学を考えたときに、もう少し教室の授業にとどまらない形で、外へ広がる教育も視野に入れるべきだろうということで広がったのが、学生の学習及び課外活動支援、それと、大学と地域・社会との連携という、その二つのテーマです。現行では、総合的取り組みから教育課程、教育方法、学生の学習及び課外活動支援と大学と地域社会との連携ということで、五つのテーマ設定をしております。

ただ、ここ2年ほどやりまして、学習及び課外活動支援では、正規の授業ではないところでの活動を中心に申請される大学が増え、また社会貢献も大学の機能の一つとして重視されていることも影響しているのかもしれませんが、大学と地域社会との連携のテーマで、単に地域貢献だけをとりあげ、学生の教育と関わりのないプログラムの申請が増えてきている傾向がみられます。もう少し本来の趣旨に帰って、あくまでも教育活動の一環として、このような取り組みを行っているところを重視しようという話が今年度は出ております。

ただ、こういう五つのテーマを作ったところで、果たしてどのような具体的な取り組みがそのカテゴリーに相当するのか。恐らく大学は悩まれるだろうということで、例示をすることにしました。そうしますと、これは再三先生がたのお話にも出ておりますけれども、例示の持つ拘束性の怖さを嫌というほど知りました。

本日、審査要項を持ってきておりますので、ちょっと見てみましょう。例えば、教育課程の工夫・改善に関するテーマという部分にどのようなテーマ、取り組みの例等を挙げているかといいますと、現代における教養教育への取り組み、体験的な学習を取り入れた教育課程、導入教育、初年次教育、キャリアガイダンス、等々が例示され、最後に、「など」と書かれております。決してそれにとらわれるものではないという意味で「など」ということを強調したのですが、実際に1年め、2年めが終わりまして、例示に挙げられている取り組みが選定されていない、あるいは、例示に挙げてある取り組みが複数選定されているのにもかかわらず、他のものが選定されていないというおしかりを随分受けました。あくまでも「など」といっても、やはり例示の持つ拘束性、怖さをつくづく感じた次第です。

そのテーマを設定したあと、次に我々が何を問題にしたかといいますと、それぞれの取り組みのどこの部分を自己評価していただくかという点です。これはあくまでも大学の申請書に基づいて審査委員が審査をするという形態をとっておりますので、ベースになるのは大学から申請されてくる申請書のみです。その、申請書にどういう観点を盛

り込んで書いていただくかという観点を決めなくてはなりません。

そこで、現在入れておりますのは、特色性から始まり（今年度は特性に変えましたけれど）、組織性、有効性、将来発展性等々の観点を書き、なおかつ特性とはどのようなものを指すのかというような、簡単な文章を載せております。

しかし、これは実際にお読みください。実は、委員の中でもだいぶ議論になったのですが、あまり一貫性がとれていない部分があります。例えば、特性というところをお読みいただくといいのですが、一方では先進的な試みとっておきながら、同じ文章の中で、他の大学の参考になること、あるいは他の大学と共有できる根幹、時代や社会の要請に沿ったものというような表現が、先進的な試みと一緒に使われております。それ自身は必ずしも文章の中で矛盾しているわけではないのですが、よく読み込んでいくと、では先進的な試みといったものは、果たして他の大学の参考にすぐになるのか。あるいは、先進的なものであれば、それは共有できる根幹になりうるのか。そういう若干の矛盾点を含んでいる部分があります。

もう一つ例を挙げますと、将来発展性です。実績を重視するという方向で始まった特色 GP ですが、やはり将来伸びる可能性がないのであれば選定する意味がないだろうということで、将来発展性という観点を入れました。実績に基づきつつ、かつ将来さらに発展する可能性のあるものをということを考えたのですが、これまでの実績ということと発展する可能性ということが、果たしてどこまで両立しうるのかという問題を含んでおります。

このような議論が進んでおりまして、特に問題になったことが次の点、有効性とは何かという問題です。これは、もっと簡単にいってしまえば、教育効果をどのように評価するのかということです。

有効性に関しては幾つか留意点の文章を書き替えてきました。ここの文章作成がいちばん苦労した点であり、また、実際に審査する立場に立ってもいちばん苦労している点です。と申しますのは、目標を立てます。それについて取り組みを行います。では、取り組みの成果や効果をどのように表していただくかという点です。これは機構の評価にもありますけれども、インプットがあれば、必ずそれに対するアウトカムが求められてきます。

当初は、「予定していた教育効果をどのように把握し、どれだけ成果を上げたかと分析しているか」、要は、インプットとアウトカムだけ見ようといっていたのです。しかし、よく考えてみると、果たして教育のアウトカムとは何だ、という話になったわけです。「目標とする教育効果をどのように設定し、その目標を達成するためにどのような努力を払ったか。また、教育効果をどのような方法で測定・評価したか（しようとしているか）」ということで、実はアウトカムを括弧に入れて見なくてはいけなのではないか。これはいってみれば、我々大学人が大学を評価することとは、すぐ自分の身に振り返ってくるのですけれども、果たして、ある教育プログラムを実施した結果、どのような効果が上がりましたかといったときに、どういう形で他者に示せるか。それを考えると、実は日本の大学は、このアウトカムをきちんと出せるようなところが一体どのぐらいあるのだろうということで、我々はクエスチョンをつけてしまったわけです。それでは、アウトカムが出ないのであれば、もう少しプロセス重視にしようということで、当初の段階はこのような文章で出そうということになったのです。

いろいろやっていく中で、今年度は、それでもアウトカムは出してもらわないと我々は分からないということになり、やはりアウトカムを書いていただく方向で話を変えております。このあたりは同じですけど、「この取り組みからどういう効果が得られているか。教育効果の測定方法及び評価方法は適切か。そのための新しい工夫はあるか」ということで、ストレートに成果を上げたかと分析しているかという表現ではありませんけれども、もう少し軟らかい形で、やはりアウトカムは必要だろうということになったわけです。

このような議論をしていく中で図らずも明らかになったのは、我々日本の大学は「教育効果」という問題をどのように示すことができるかということに、実はあまり十分に組み込んでこなかったのではないかと問題の指摘でした。

実際に特色 GP の申請書でどのような教育効果指標が使われているかというのは、毎年、選定された取り組みに対しては事例集という厚い冊子が出ております。それをごらんいただければ分かると思いますけれども、よく用いられているものが学生の授業評価です。

そこでは、授業の有効性なり満足度なり達成感などが数値指標として出されております。あるいは、あるプログラ

ムへの参加者の増加という人数を用いた指標もあります。学生の成果物でプロジェクトや卒論が大変優れたものだというものもあります。もっとストレートに客観的な指標ということで、外部テストの得点、TOEIC、英検等を用いて、その点数が上がったということを指標にしているものもあります。さらに客観的なものとしては外部評価、外部評価委員の評価なり、あるいは就職先や地域社会からの評価を指標としているものもあります。

このような形でさまざまに示されてはいますが、実はあまり用いられていない評価、定性的な評価、これはほとんどありません。具体的にいえば、学生の抽象的な能力、論理的能力とか批判的思考力などの養成が重要だということは再三指摘されておりますけれども、では、それは果たしてどうやったら分かるのか。それを示す手段を、私たちはあまり持ちえていないのかもしれないかもしれません。実際に現場に携わっていらっしゃる先生がたはよく認識されているはずですが、では、それをそこにいない人たちにどのように見せることができるのかというところです。

もう一つは目標に照らした評価ということですが、目標は書いてあります。しかし、その目標があまりにも崇高な理念・目標であるがゆえに、その目標と実際の成果とをどう結びつけたらいいのかという点で、審査者にはよく見えてこないという問題もあります。

一方で、こうした客観的指標、こうしたものが出ていれば、これは教育の効果として、その有効性を示すものとなるのか。確かにどれも客観的な指標ではありますけれども、これだけではないだろうというのが大方の認識だろうと思います。他方で、そうではない、もう少し主観的な指標を他者に示すために客観化することの困難性もあるのだということのようです。

日本の大学が、果たしてどのような教育評価をこれまでやってきたかということを、これは文科省が毎年出している「大学における教育内容等の改革状況について」という調査結果があります。これから教育評価に関連するものを取り出してきました。

例えば、学生の授業評価をやっているところは84%、それを改革に反映しているところは28%ということで、学生の授業評価はかなりの部分、定着が見られますが、ある意味、やりっ放しに近い部分もあります。あるいは、厳格な成績評価（GPA）は2割そこそこ、外部テストの利用4割、それから、教育プログラムの外部基準の適用、これはJABEE等がありますけれども、具体的な数値までは書いてありませんが、こうしたものもあります。あるいは、自己点検評価もほぼ定着しております。それに伴う外部評価も4割、半数程度はやっているというところです。

さらに、今後、大学評価機構の評価もあり、認証評価制度もありということで、さまざまな形での教育評価はなされてはいるのですけれども、果たしてそれが教育の成果の評価をどこまで十分に測りえているかというところは、若干のクエスチョンがつく部分です。

大きく見て、学生の単なる達成度から、もう少し大学の付与する教育の評価へ、これらの評価は視点をシフトさせているということは分かります。また、アウトプットのみの評価ではなく、インプットやプロセスの部分も含めた評価になっていることも分かりますが、教育の結果、学生についた付加価値は何なのかということを示すことは、いずれを取ってみても容易には測定できないということです。

そういう状況の中で、今後、特色GPに限らず、我々に必要な教育の成果を評価するうえでの視点を幾つか、ご提案とともにご提示したいと思います。

特色GPそのものは、教育という組織内に閉じられた活動を公開し、他大学の参考にしてもらうという非常に単純な目的で行っております。しかし、これまで見てきましたように、他者による「教育」の評価は、実は研究以上に大変だということはお分かりいただけたのではないのでしょうか。それとともに、教育の効果を自己評価する方法については、我々はなかなかいい方法を持ちえていないということもお分かりいただけたかと思います。

そうした中で、限界はあるにせよ、今後必要なこととしては、一つは、他者による特色GPの評価ということで、我々がやっている審査そのものを大学の先生がたにもう一度評価していただくことも必要だろうと思っております。そういう意味ではメタ評価の部分です。

それとともに、もう一つ重要なのは、果たして我々審査委員に見識があったかどうかということを一ちばんよく示していただくのは、選定された取り組みが今後どのような形で展開されていくかということです。その意味では、選



定されたこうした取り組みをフォローアップしていくことも必要だろうと思います。確かに、毎年度、フォーラムもやっておりますし、事例集も出しております。しかし、教育は単発ではありません。日常的な地道な取り組みがあって初めて教育が成り立つことを考えたときには、もう少し長い目でフォローアップをしていくことも必要なかと思っています。

いずれにしましても、大学人である以上、教育から逃げるわけにはいきません。教育は我々の最重要な役割の一つでもありますけれども、その教育を見分ける目を持てるかどうかというのは、大学人の見識が問われている、そこに尽きるのではないかと思います。

そういう意味で、これが当たった、当たらないというような発想ではなくて、もう少し長い目で、これが、日本の大学が教育へ力を入れていくうえでの一つのきっかけになっていけばいいのではないか。その程度の意味のものであるというように、私は思っています。

以上で、私の話を終わらせていただきます。ご清聴どうもありがとうございました。

（大塚） 吉田文さん、どうもありがとうございました。

根拠データが大事ということはどの評価でもそうなのですが、やはり教育成果、アウトカムを示すというのが難しいということを改めて認識させていただきました。確かに、評価をしていると、インプットとかプロセスの部分のデータがたくさん出ても、それはあまり参考にならないというか、自己評価書にその記述さえあれば、そうなのだろうと、それはあまり疑う部分はないのですけれども、だからどうなってるんだろうという部分を知りたいにもかかわらず、なかなかその部分のデータは示されることがないんですね。それだけに、アウトカムに関する何らかのデータが出されていると、「おっ」と思うのです。だから、その辺は、これから我々が評価に臨むときの一つの勘どころになっていくのではないかと思います。

それでは、評価する側の論理という側ですけれども、される側も含めて、私の同僚であります京都大学高等教育研究開発推進センターの松下佳代さんからお願いいたします。

第11回大学教育研究フォーラム  
京都大学高等教育研究開発推進センター (March 22, 2005)

**教育の効果を評価する**

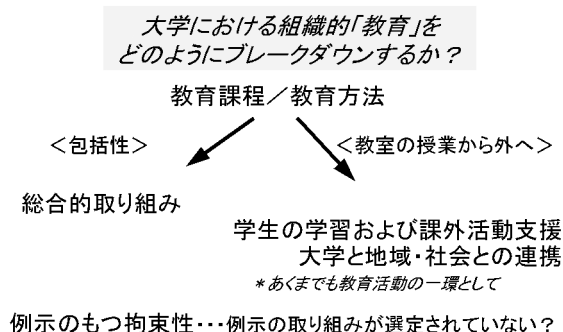
**吉田 文**  
(メディア教育開発センター)

**1. モデルなき特色GP**

2003年3月.....  
COEの教育版を作る計画、しかし、教育を評価する  
モデルがない...どのようなタイプのプログラムにするか？  
・ランキングにはしない→「特色」  
・選抜の単位と評価の側面

組織 <選抜の単位>  
ここを評価しよう！  
実績 計画 <評価の側面>  
個人

## 2. 5つのテーマと例示



## 3. 留意点の論点

取り組みのどの部分を  
自己評価してもらうか？

特(色)性、組織性、有効性、将来発展性

＜特(色)性＞とは何か？

先進的試み ⇄ 他の参考になること／共有できる根幹／時代や社会の要請

＜将来発展性＞とは何か？

これまでの実績 ⇄ 発展する可能性

## 4. 有効性とは何か

教育効果をどのように評価するか？

・「予定していた教育効果をどのように把握し、どれだけ成果をあげたと分析しているか」(input-outcome)

・「目標とする教育効果をどのように設定し、その目標を達成するためにどのような努力を払ったか。また、教育効果をどのような方法で測定・評価したか(しようとしているか)。」(input-process-outcome)

・「理念・目的に基づいて、具体的教育目標を設定しているか。目標の達成に向けた手段・プロセスは適切か。この取組からどういう効果が得られているか。教育効果の測定方法および評価方法は適切か。そのための新しい工夫はあるか。」(input-process-outcome)

「教育効果」について取り組んでこなかった日本の大学の問題

## 5. 特色GPにおける教育効果指標

＜よく用いられている指標＞

1. 学生の授業評価 (授業の有効性、満足度、達成感など)
2. プログラム参加者の増加
3. 学生の成果物 (プロジェクト、卒論など)
4. 外部テスト得点 (TOEIC、英検など)
5. 外部評価 (外部評価委員、就職先・地域社会など)

＜あまり用いられていない評価＞

1. 定性的な評価 (学生の抽象的能力の向上など)
2. 目標に照らした評価

客観的指標の限界、主観的指標を客観化する困難。

## 6. 日本の大学の教育評価

＜近年の教育評価＞

- |                               |          |
|-------------------------------|----------|
| 1. 学生の授業評価と結果を改革に反映           | 84%と28%  |
| 2. 厳格な成績評価(GPA)               | 21%が実施   |
| 3. 外部テストの利用(eg. TOEICなど)      | 39%が授業設置 |
| 4. 教育プログラムの外部基準の適用(eg. JABEE) |          |
| 5. 自己点検評価と外部評価                | 84%と41%  |
| 6. 大学評価機構の評価、認証評価制度           |          |

(数値は、文部科学省(2004)『大学における教育内容等の改革状況について』より)

学生の達成度から、大学の付与する教育の評価へ  
アウトプットのための評価から、インプット・プロセスも含めた評価へ  
教育の結果、学生についた付加価値を示すことは容易ではない

## 7. メタ評価の必要性

特色GPのねらい:

教育という組織内に閉じた活動を公開し、他大学の参考に  
にしてもらう

しかし、

- ・他者による「教育」の評価は容易ではない
- ・教育「効果」の自己評価の方法の限界

そこで、

- ・他者による特色GPの評価
- ・選定された取り組みのフォローアップ

大学人の見識が問われている！